

以上、前報に引続きアマギザサ節 *sect. Monilicladae* を取り扱ってきたが、この *section* はほかの 4 節に比較し、種数が少なく、分布域ももっとも狭く、福島県南部から近畿地方東部までと、四国の一部に産することが知られていた。この度、分布域が中国地方と九州まで拡大され、それにつれて種類数も従来の 4 種から 6 種、1 変種、5 品種に増加した。とくに愛媛県にはこの節の全種類が生育し、そのようなことは他県では全く見られず、注目に値する。それには地元西条高等学校教諭の藤田幹雄氏の努力に負うところがきわめて多い。

□館岡亜緒：植物の種分化と分類 269 pp. 1983. 養賢堂，東京．¥3,000. これから植物分類学を勉強しようとする人に「先ずこの本を読みなさい」といってすすめられるようなスタンダードな教科書が、日本にはこれまでほとんどなかった。この本はそのような空白を埋める意味でまさに待ち望まれた教科書である。これから新しく植物分類学の研究に携わるようになるたくさんの方がこの本を読み、この本に盛られた知識を分類学の基礎として身につけることになるだろう。そのことによって分類学の基礎知識が標準化されていくのは学問の進歩にとって必要であり好ましいことである。本書の前半では隔離や種概念、遺伝的分化をもたらす諸要因や種内変異などの基礎的事項が整理され、後半では一次的種分化・雑種形成・倍数体形成といったモードの異なる種分化について具体例をあげて解説が加えられている。最後の 2 章は細胞地理学及び種以上のレベルの進化についての記述にあてられ、全体として分類学者が研究過程で直面する生物学的諸現象がもろさず体系的に記述されている。著者のイネ科についての研究業績が随所に引用されこの本の土台となっているが、イネ科以外についての研究例も多数引用されている。著者以外の研究者の業績を紹介するにあたっては、新しい論文をたくさん引用するというよりも、本当に重要な論文を十分に吟味してとりあげるといった姿勢が感じられ、それがこの教科書の特徴のひとつになっている。しかしその反面で、文献引用が少なくなりすぎているきらいがあることも否定できないと思う。たとえば隔離機構については Levin (1978) による 100 ページに及ぶレビューが発表されているし、種分化の機構の類別については最近 Templeton (1981) によって新しい提案がなされている。こうした総説については言及があってもよかったのではないか。まとまった総説を中心に各章末に *further readings* が解説されていれば、これから分類学を勉強しようとする人への道しるべとしてはもっと使いやすいものになったと思う。この本がすぐれた教科書として版を重ね、そうした改訂が加えられる機会があることを期待したい。(矢原徹一)